

東海に残るメディア遺構——JOCK と市民の建設したラジオ塔

丸山 友美
(メディア・映像学科)

本稿は、第一に聴取加入者100万突破記念プロジェクトで建設されたラジオ塔に見出したローカリティはなぜ漂白されたのかを検討し、第二にラジオ塔のローカリティを担保したアクターは誰だったのか特定し、第三に1933年の皇太子御降誕という出来事がいかにラジオ塔建設をメディア・イベント化させていたのか提示する。以上の作業を通して本稿で明らかになるのは、市民の手によって建設・寄付されたラジオ塔からはローカリティが漂白されてしまい、むしろ「体位向上」という国家目標に収斂される目的を掲げたモノとして受容・消費されるようになっていく実態である。

【キーワード ラジオ塔 メディア遺構 JOCK プロダクション・スタディーズ】

1. 日本放送協会から寄付されるラジオ塔から、市民から寄付されるラジオ塔へ

「戦時中まで全国に建てられた「ラジオ塔」をご存知かー。」そんな一文で始まる2017年2月25日に発行された『中日新聞』の22面に掲載された「ラジオ塔 戦争語り継ぐ」と題する記事は、この前年2月にある一人の男性が志賀公園のラジオ塔について住民に尋ねたことで名古屋市西志賀町五丁目自治会会長の知るところとなり、保存運動の機運が高まりつつあることを伝えている¹⁾。全国を訪ね歩いて『ラジオ塔大百科 2011-2014』（タカノメ特殊部隊）と『ラジオ塔大百科 2017』（タカノメ特殊部隊）にまとめた一冊公平を筆頭に、近年は各地に残るラジオ塔の存在が次々と確認され（柴田 2021:263-277; 吉井 2011 など）、地元住民が戦前に建設されたラジオ塔というメディア遺構を保存する必要性を行政に訴えるようになっていく。

そうした声に応答してラジオ塔の保存に乗り出した地方自治体の一つに名古屋市がある。市内には、中村公園と松葉公園、そして先述した志賀公園の三ヶ所に戦前の姿のままのラジオ塔が残存しており、これに加えて道徳公園にはラジオ塔の台座と思われる遺構が残っている（一幡 2017:17）。受信機やスピーカーを失い、風雨に晒されたこの建造物を、ラジオ塔だと記憶している地元住民はほとんどいない。現在、名古屋市のラジオ塔3基には、この建造物がラジオ塔であることを今に伝える解説文を付した案内板が設置されている（図1、図2）。例えば志賀公園の案内板には、ラジオ塔建設の経緯が次のように紹介されている。

ラジオ塔

ラジオ塔は昭和5年以降、ラジオ放送を市民が自由に聞けるようにと日本各地に設置されるようになりました。

志賀公園には、昭和17年度に名古屋市西志賀土地区画整理組合の寄附により設置されました。

塔の上部に受信機やスピーカーが置かれ、塔の周りで市民が放送を聞いていました。

市内には10ヶ所ほど設置されましたが、現在は志賀公園の他に中村公園、松葉公園に当時のラジオ塔が残されています。

名古屋市

この案内板は市民の興味を煽ることに成功しているようだ。「名古屋市についての資料をどこよりも揃え」「名古屋のことならどこよりもしつこく調べ」「名古屋のことを調べているみんなのお手伝いをどこよりもする」という名古屋市図書館で活動する「名古屋なんでも調査団」（以下、調査団）²⁾の『調査団報告書』の調査No.85には、「ラジオが受信できるようには見え」（名古屋市図書館なんでも調査団 2019:1）ない名古屋のラジオ塔について教えてほしいと調査依頼する市民の姿を確認できる。この報告書では、調査団により「名古屋市内には少なくとも9か所（鶴舞、中村、志賀、南久屋、道徳、松葉、上名古屋の各公園と笠寺観音、東別院）に設置」されていたことが確

認されているが、ここにはさらに図書館利用者からの情報提供により「鶴舞公園のラジオ塔の詳細な位置や新たなラジオ塔の存在」が明らかになり、昭和18年版の『名古屋の公園上巻』に「東山公園（動物園内）にもラジオ（ラジオ）塔があったとの記載」を確認したこと、そして1943年にまとめられた『皇太子殿下御降誕記念事業公園』では「港北公園にもラジオ塔があったとの記載」を確認できたことが追記されている（名古屋市区図書館なんでも調査団 2019:1）。



図1 志賀公園のラジオ塔
(2019年2月3日筆者撮影)



図2 志賀公園のラジオ塔案内板
(2019年2月3日筆者撮影)

このように公園の片隅や神社の境内にひっそり佇み、いまでは由来のわからないモニュメントとして街の風景になじんでいるラジオ塔の開発経緯や全国展開のプロセスを検討したのが、2021年に発表した拙稿「関西に残るメディア遺構——JOBKの建設したラジオ塔」と2022年に発表した拙稿「関東に残るメディア遺構——JOAKの建設したラジオ塔」という2つの論考である。前者では、ラジオ塔を企画・開発した日本放送協会の関西支部（以下、BK）の計画部／総務部企画課の活動に着目し、ラジオ塔が放送事業者の頭を悩ませた「聴取者加入廃止」の抑制対策の一環で企画・開発されたメディアだったことを指摘した。それはつまり、ラジオ塔が「常設受信拡大装置」という「ラジオと共にある生活」の意義を、[聴取者]自らの生活の中に見出していくモノ（丸山 2021:22）として登場した街頭ラジオだったという忘却されたローカルな放送史である。けれども、BKの考案したラジオ塔は、1932年に聴取加入者100万突破という日本放送協会の記念事業に組み込まれたことで、その意味を大きく変容させていくことになる。それが、「国家非常時に放送を届けるのに社会的役割を担うモノ」として解釈し直され、「公衆用聴取施設」として全国各地に急造されたラジオ塔に新たに付与された役割だった（丸山 2021:21-22）。このようにして2021年の論考では、1932年以降に建設されたラジオ塔は、BKが建設したラジオ塔に内在したローカリティを喪失したモノとして聴取者の前にあらわれていたと結論づけた。

こうした旧稿に対し、聴取加入者100万突破の記念事業の一環で建設されたラジオ塔にもローカリティが認められることを指摘したのが、翌年に発表したもう一つの論考である。ここでは、日本放送協会の関東支部（以下、AK）の総務部企画課と横浜市、そして逓信省の三者の様々な思惑が複雑に絡まり合いながら、横浜・野毛山公園にラジオ塔が建設されるプロセスを検証した。このような作業から見出したのが、野毛山のラジオ塔が「想像以上に、「場所」の固有性と密接な関係を築いたモノ」（丸山 2022:24）として、人々の前にあらわれていたというラジオ塔を巡るもう一つのローカルな放送史である。ただし、そのようにして多様化したはずのラジオ塔のローカリティは、

日本放送協会による「一戸一受信機」キャンペーンに組み込まれ全国各地に増設されたこと」で消失してしまい、「建設された理由や由来が国家政策に絡め取られ」た結果として、ラジオ塔はその意味や役割を「非-場所」なモノへと変容」していかざるを得なくなった（丸山 2022:24）。このようにして後者の論考では、記念事業の一環で1932年から1933年頃に建設されたラジオ塔には認められるラジオ塔のローカリティが、1939年から1940年頃に建設されたラジオ塔からは喪失していた可能性が高いと結論づけた。残念ながら2つの論考で問いつけた「聴取者が自らの生活の中でラジオ塔をいかに受容・消費していたのか」（丸山 2022:24）という課題は、十分な資料が見つからず、残ったままになっている。

これに応えるため、筆者は引き続き、全国に残るラジオ塔にかんする資料調査に取り組んだ。本稿は、この調査を通じて発見した新資料に基づき、これまでの論考では十分に検討できなかったラジオ塔の意味変容の過程に市民の存在を加えることを試みる。後に詳しく見ていくが、1933年12月23日の皇太子（現、上皇）誕生の記念として皇室から「母性並児童保護事業」に下賜された75万円を基に、名古屋市が施行した「皇太子殿下御降誕記念事業」によって市内に公園が増設されると、市民が新設された公園にラジオ塔を建設・寄付していた。こうした取り組みを、本稿では次の三つの観点から検討していく。第一に聴取加入者100万突破記念プロジェクトで建設されたラジオ塔に見出したローカリティはなぜ漂白されたのか検討し、第二にラジオ塔のローカリティを担保したアクターは誰だったのか特定し、第三に1933年の皇太子御降誕という出来事がいかにラジオ塔建設をメディア・イベント化させていったのか提示する。

2. 「加入聴取者100万突破」を記念して建設されたラジオ塔のローカリティ

2. 1 新潟・白山公園のラジオ塔

日本における放送事業は、1925年に東京・大阪・名古屋の三都市に誕生した社団法人東京放送局（AK）、社団法人大阪放送局（BK）、社団法人名古屋放送局（CK）の三事業者によって始まった。翌1926年、三局は逓信省による合同化の助言と指導を受け、同年8月に社団法人日本放送協会（以下、放送協会）を発足させると、それぞれ関東支部・関西支部・東海支部として放送協会に組み直された。その後、1928年11月の天皇即位行事に合わせて、1927年に北海道支部（札幌放送局）、九州支部（熊本放送局）、東北支部（仙台放送局）、中国支部（広島放送局）の4支部が設置され、全国放送に必要な中継網が整備されるに至った（村上 2017:30）。また、1930年代前半には県庁所在地を中心に各地に放送局が設置されるが、新設された放送局は各支部の傘下に置かれたことから、その活動指針は支部単位で決定されたという（村上 2017:32）。本稿で言及する支部と放送局に限って挙げれば、関東支部（東京中央放送局）の傘下に新潟放送局、前橋放送局、静岡放送局、長野放送局が設置され、東海支部（名古屋中央放送局）の傘下に浜松放送局、金沢放送局、福井放送局が設置されたという具合である。

新潟放送局は、新潟県新潟市旭町の水道用地に局舎を起工し、1931年11月11日に実施した盛大な開局式を経て本放送を開始した。これにより、「直接東京中央放送局其の他の既設放送局よりの受信も不可能では」なかった「一部」の人々にのみ開かれていたラジオは、新潟に暮らす様々な人々でも「低廉な費用でしかも完全に聴取されラジオ文化の利用吸収は意の儘と」（1931年11月11日付『新潟新聞』1面）することができるようになった。けれども、ことはそう上手くはいかなかったようだ。新潟市が2000年に発行した『新潟歴史双書4 白山公園あたり』には、次のような文章を見つけることができる。

新潟市内のラジオ放送の聴取登録件数は、新潟放送局開局前の[昭和]6年5月末には751件であったが、8年12月には4976件に増加した。とはいえ、これは市内世帯数の五分の一で、ラジオ受信機のない家が多かった。開局一周年の7年11月11日、新潟放送局はラジオの普及を図って白山公園内にラジオ放送を流す施設を寄付した。それがラジオ塔であった。この塔は全国から懸賞募集して決めたデザインに基づいて、市の土木課が建てた。たたずんだり、散策したりしながら、ラジオ塔から流れる放送に耳を傾ける人も多かった。これ以後、借楽館を背景に蓮池とその中央にラジオ塔が立つ風景は、白山公園の絵葉書の定番になった。（新潟市 2000:51-

新潟放送局が白山公園にラジオ塔を建設し、それを開局一周年に合わせて新潟市に寄付したのは³⁾、新潟放送局管内におけるより一層のラジオの普及を企図したものだったというわけだ。実際、開局一周年を報じる当時の地方紙に目を向けると、新潟放送局の一年間の活動を評価しつつ、ラジオ塔の設置によりラジオ文化のさらなる発展を祈念する文面が見つかる。1932年11月11日付『新潟新聞』1面では、「新潟放送局では一周年を永遠に記念するため白山公園の蓮池に優美なるラヂオ塔を建設して新潟市へ寄附し心身の休息を欲して公園に足を運ぶ多くの人々に刻々の放送を伝える」モノとしてラジオ塔が紹介されており、同紙面には「記念のラヂオ塔」と題する新潟市長の寄稿記事も掲載されている(図3)。その内容は以下の通りである。⁴⁾



図3 1932年11月11日付
『新潟新聞』1面より「記念のラヂオ塔」

記念のラヂオ塔

新潟市長 中村淑人

新潟放送局の新設されてより茲に一周年を迎へこれを記念するために白山公園内蓮池にラヂオ塔を建設されその除幕式を挙げることは慶賀の至りに堪へざるものなりラヂオが政治、経済、産業、教育、衛生等の向上発展に資するところ大なるものあることは世間のひとしく認むるところにて当局もこれを更に一般と大衆化シラヂオの機能を遺憾なく発揮します、国運の進展に努むる方針をもつて種々計算されつゝあるを仄聞するところ。しかるに今ラヂオ塔の建設を見るに至りし方は●にラヂオの普及化実現の第一歩といふべし、而も建設されたるラヂオ塔は公園蓮池中に高尚にして優美に出来て白山公園の風致に光彩を添たる方は感慨深く能はざる次第であると共此ラヂオ塔によつてラヂオはますます大衆化し当局の理想に一步を進めた方を如実に示したるものといふべく従つて新潟放送局の前途は実に多幸多福といはねばならぬ。こゝに謹んでラヂオ塔除幕式の挙行に当り祝意を表するものである。

また、同日の4面には、「白山のラヂオ塔竣成」という見出しと共に、完成したラジオ塔の姿を写真で確認すること

ができる。この写真には次のような文面が添えられている（図4）。



図4 1932年11月11日付
『新潟新聞』4面より「白山のラヂオ塔竣」

白山のラヂオ塔竣成

既報、市内白山公園蓮池中央に建設中のラヂオ塔は写真で見る通り去る九日立派に出来上り、十一日除幕式を待つばかりとなった。此の塔はAKが全国から懸賞募集した多数の提案の内から選り抜いた美しいもので二百圓の工費で市土木課の手で竣成されたものである。高さは地上より十四尺六寸五分、和洋せつちゅうの公園池には最適の建築物で白山公園の一異彩である。スピーカーのスキッチは公開看視人の詰所に設置し、適ぎ放送するものである（写真は醸成せるラヂオ塔）

かくして、新潟放送局が新潟市に寄付したラヂオ塔は「中村市長、入江助役以下市役所各課長、星市会副議長以下市会議員、三十五連合会長、羽入本社常務、市内ラヂオ商組合員其他約五十名、放送局側よりは中山常務、苫米地企画課長、後藤宣伝係長、新谷QK局長以下局員十余名」を来賓に迎え、「入江市助役令嬢の可愛手で除幕」（1932年11月12日付『新潟新聞』4面）された。白山公園のラヂオ塔は好評を博し、1933年6月4日付『東北時報』の5面はラヂオ塔を受容・消費する人々の姿をユーモアを交えて伝えている。いわく、「ラヂオファンが夏の夜、白山公園池畔のベンチで熱心に聴き入つてるが、此ラヂオ塔、最初は大声を發したのが、此の頃は或る囁きほどにしか聞こえなくなった、塔氏さほど遠慮しなくとも良い、闇にさゝやく男女を吐鳴り付ける位みに朗らかになり玉へ」といった具合である。

なお、旧稿（2022）では、1932年9月5日に発行された『関東支部彙報』31号を用いてAK総務部企画課が東京・横浜・長野・静岡・新潟・前橋の6箇所々にラヂオ塔を建設するまでの動きを確認したが、この時AK総務部企画課の念頭にあったのは、聴取加入者100万突破を記念してラヂオ塔を建設するということである。そのため、新潟放送局の開局一周年を記念してラヂオ塔を建設したという説明は、副次的なものだった可能性が高い。

2. 2名古屋・鶴舞公園のラジオ塔

このようにしてBK 企画課が開発したラジオ塔はAK 企画課によってAK 管内に次々と建設されていったが、この二支部と共に1925年に放送事業を開始し、1926年に東海支部として日本放送協会に組み込まれたCKもラジオ塔の建設に取り組んでいた。CK管内で初めてラジオ塔が建設されたのは、名古屋市昭和区にある鶴舞公園である。1933年4月1日から稼働し始めたこのラジオ塔は、BKやAKが建設したラジオ塔とはやや異なる「あくび型燈籠」あるいは「古代型灯籠形」（人見 2019:201; JOCK 欄 1933b:66, 1933c:73）という建築様式によって人々の前にあらわれた。1933年3月31日付『新愛知』2面には、「桜花の下でラヂオ聴く麗かさ 鶴舞公園胡蝶池畔にできたコンクリート製巨大な怪物 CK ラヂオ塔竣成」と題する記事が掲載されており、CK主導で初めて建設したラジオ塔の完成が次のように報じられている（図5）。



図5 1933年3月31日

『中日新聞』2面「桜花の下でラヂオ聴く麗かさ」

◇…一ヶ月程前から名古屋鶴舞公園胡蝶ヶ池の畔に、馬鹿に頑丈でグロテスクな体躯をしたコンクリート製の怪物が佇立して、公園へ遊びに来た坊ちゃんや嬢ちゃんたちが「あれなんだろうか」と訝つてみましたが、竣工に近づくと共に、段々姿を●へて三十日にはとうとう見事に燈籠の正体を現はしました

◇…これは名古屋中央放送局が工費千数百円を投じた苦心の計画になるラヂオ塔で、三十日のテストを見事にパスし四月一日から愈々高座ならぬ池の畔から、或は浪花節を、或は講演を、或はラヂオドラマを、或は坊ちゃんや嬢ちゃんを喜ばせる童話劇を、ラウドスピークすることになりました。差し当つて野球ファンが聞き逃さじと待望の甲子園全国選抜中等学校

◇…野球大会の中継放送が聞かれるわけですが、此のラヂオ塔は音楽堂あたりのベンチに腰掛けてゐても聞かれると云ひますから、便利なものです。殊に夜間には電燈が点ぜられ終宵漫步の折、悩める春の心を慰める相手ともなるもの。CK 局側案になる此のラヂオ塔は、鶴舞公園の外に

◇…長良川畔の岐阜公園金華山麓の一つ、殆んど之と同時に開始し、日本三公園の一金沢の兼六公園のは四月半ばから、また福井市佐佳枝境内にもこんなラヂオ塔が五月中には設けられます。

これに「胡蝶ヶ池付近のベンチに腰を下してラヂオ漫談でも聞きながら人生の愉楽を満喫して下さい」という文句が続く。なお、この時鶴舞公園に建設されたラヂオ塔は「高さ十尺リソイド塗の淡青色」のもので、聴取者が利用しやすいように「その日その日のプログラムは対岸の東屋内の掲示板に掲載」（『中日新聞』1933年3月31日2面）されていたという。CK 管内で初めて建設された鶴舞公園のラヂオ塔は、『ラヂオの日本』の16(5)号が伝えるところによれば「開始早々より非常な人気を集め多数の人々の聴取せられて」（JOCK 欄 1933a:72）いたという。このことを踏まえれば、ラヂオの一般化と大衆化に鶴舞公園のラヂオ塔が役立ったことは間違いない。だが、この地域では困ったことに「石燈等の完成した時に、一番最初にその一片を剥ぎ取った物は金が溜るといふ迷信からか、ラヂオ塔の笠の一部分が剥がれて居る形跡が」（JOCK 欄 1933a:72-73）確認され、局員が驚いたというエピソードも同号には合わせて掲載されている。なお、鶴舞公園に設置されたラヂオ塔には、「天蓋の中に拡声器（RCA 製、AC ダイナミックスピーカー）を装備して音が四方へ一様に伝搬する様反対装置をほどこし、音質を損なはぬため緩衝装置が設けられて」いたのにくわえて、「高周波増幅に UY2242 段、検波は UY224、アノード検波、低周波一段目にベントード UY247B、終段は UX245 プッシュプル増幅にて出力約4ワット。別にレコード演奏の場合のピックアップ。音声増幅の場合のマイクロフォン用増幅装置として UY224 一ケを使用し任意切替し得る」ようになっており、「二重放送実施の暁にはスイッチにて簡単に第一放送と第二放送とを切り替へし得る」とことと「音声に歪みのない様蓄電器容量や抵抗の選択に意が注がれて」（JOCK 欄 1933b:67）いた。そして「塔には掛燈籠を付けこれが灯はパイロット、ランプを兼ねてゐる」（JOCK 欄 1933b:68）ようになっていた。

こうしたラヂオ塔の建築様式や付帯設備もさることながら、塗装を剥ぎ取る行為は他の支部管内で建設されたラヂオ塔の記録には、管見の限り残されていない。これを踏まえると、局員を驚かせたというこの事件もラヂオ塔のローカリティを示しているように思われる。それはまた、CK 管内におけるラヂオ塔の受容と消費の一旦を示すエピソードとしても解釈可能なもののはずだ。そこで次節では、CK 管内におけるラヂオ塔の増設過程を受容・消費する存在としてのみ捉えてきた聴取者（市民）の側から検討してみたい。

3. 市民の手で建設・寄付されたラヂオ塔

3. 1 道徳公園（1940年）

愛知県名古屋市中区にある市政資料館で保存されている公文書の検索サイトで、「ラヂオ塔」というキーワードを入力すると9件ヒットする⁵⁾。具体的には、「道徳新町自治連合会代表外1名より道徳公園へラヂオ塔」（簿冊 ID6492, 索引番号 81, 連番 1）、「南久屋連区東部有志代表より南久屋公園へラヂオ塔」（簿冊 ID6492, 索引番号 100, 連番 1）、「上名古屋土地区画整理組合長より上名古屋公園にラヂオ塔」（簿冊 ID6492, 索引番号 101, 連番 1）、「港北耕地整理組合長より博覧会跡公園にラヂオ塔1基」（簿冊 ID6496, 索引番号 1, 連番 1）、「日本放送協会名古屋中央放送局長より東山公園及名古屋城へラヂオ塔用受信機各1台」（簿冊 ID6496, 索引番号 39, 連番 1）、「日本放送協会名古屋中央放送局長より中村公園、志賀公園ラヂオ塔用受信機」（簿冊 ID6496, 索引番号 63, 連番 1）、「日本放送協会名古屋中央放送局長より瑞徳公園ラヂオ塔用受信機」（簿冊 ID6496, 索引番号 64, 連番 1）、「東宿土地区画整理組合長並日比津土地区画整理組合長より中村公園ラヂオ塔1基」（簿冊 ID6496, 索引番号 65, 連番 1）、「名古屋中央放送局長より鶴舞公園内ラヂオ塔並附属設備一式」（簿冊 ID6122, 索引番号 19, 連番 1）である。ただし、市政資料館の端末で検索した際、これに加えて「○道徳新町自治会連合会よりラヂオ塔、受信装置」（簿冊 ID6493, 索引番号 40, 連番 5）という資料も見つかったため、これを合わせると全部で10件になる。

1940年から1944年にかけて名古屋市で建設・寄付されたラジオ塔に関する公文書の確認により、先行するラジオ塔研究（人見 2019:215-216；一幡 2017:12-17）では言及されてこなかった四つのラジオ塔の存在が明らかになった。一つは博覧会跡公園（現・港北公園）のラジオ塔であり⁶⁾、二つは東山公園のラジオ塔であり⁷⁾、三つは名古屋城のラジオ塔であり、四つは瑞穂公園のラジオ塔である。一幡は日本放送協会が発行する『ラジオ年鑑』では「すべてのラジオ塔を」網羅できていない」可能性が極めて高いことを示唆した上で、その一覧には「“漏れ”が多々ある」（一幡 2017:13）と指摘する。そのため「ラジオ塔は合計465箇所以上あったとされているが、実際のラジオ塔の総数というのは、本当はもっと多かった」（一幡 2017:3）ことは否めないという。こうしたラジオ塔の記録状況を鑑み、引き続き、筆者も調査を続ける。

さて、名古屋市で作成されたラジオ塔に関する公文書の中で注目したいのは「道徳新町自治連合会代表外1名より道徳公園へラジオ塔」という1940年に作成された記録である。そこには、寄付に至る経緯を記した「寄附採納願」と「趣意書」、そして「道徳公園ラジオ塔新設工事仕様書」が綴られている。その内容を以下に転記する。なお、転記にあたってはカタカナ表記を平仮名表記へ改めた。手書きの修正は、取り消し線を使って可能な限り再現した。

寄附採納願

一、ラヂオ塔 一基 受信装置一式附

此ノ見積価格金八百拾圓也

右御市 皇太子殿下御降誕記念事業道徳公園に建設の上御寄附申上度候間御採納被成下度段奉願候也

昭和十五年七月二十九日

（住所略）

道徳新町自治総合会代表 馬杉源次郎

同 伊東瀧次郎

名古屋市長 県 忍 殿

趣意書

上叡聖の御旨を戴き下一億の総力を聚めて八紘一字ノ大沛を掲げ陸に海に征戦茲（に）四歳大和民族発展の礎石は大陸の土の上に今や確乎として打ち建てられ様として居ます洋々たる希望は国民の前途にありて大陸はやがて大和民族第二の郷土でありませう、然るに近時我が第二の国民が体格益々弱化しその増加率も年々低下の実情にありこの儘に放任せんが兒等が父兄の碧血を以て購ひたる大陸の郷土を以て担当すべき人的資源の涸渇により空しく消滅し（、）むしろ却つて国運の昔日より悪化するの憂なしとせず真に体位向上の枢要なる今日に比するものではありません、国民は挙つてこの体位の頹勢を挽回し以て國民族発展の基礎たらしむべきであります、我が道徳新町は挙町一致老若男女を問はず茲に厚生熾烈なる運動を開始し先づ早朝のラヂオ体操の会を以てその第一着（手）とすべく定めました、これがため幸にして本町内に皇太子殿下御降誕記念事業道徳公園新設中なるを以てこの地を（とし）挙町一致構成運動の標識として併せて光輝ある皇紀二千六百年を記念すべくこの総力を以てラヂオ塔を建設し是を同公園の一般的永久施設として寄附すべく決議しました、これによりて結束せる町民は一致して毎日朝露を踏んでこの塔に集りラヂオと指導者の発声により盛大なる体操大会を開催し以て体位向上と一億一心協力の実を挙ぐる計画であります、工費予算約六百円に依りて施工する考へであります、敷地ご指定の上御許可の程御願申上ます

（受信機装置一式見積価格金貳百圓也）

昭和十五年七月二十九日

馬杉源次郎

伊東瀧次郎

名古屋市長 県 忍 殿

続けて、「道徳公園ラヂオ塔新設工事仕様書」の内容と設計図(図6)の詳細を以下に転記する。この記録から明らかになったのは、既に消失してしまったラヂオ塔の具体的な寸法と色、そして使用した材料とその建築様式である。

一、位置 名古屋市南区道徳町市立公園内

「グラウンド」北側中央に建設するものなり

整地

一、四平方米「グラウンド」面より二十糎高に整地なす

基礎

一、一米二十糎南深さ五十糎に根伐なし地杭打をなし割栗石を以て橋固め混凝土を地盤より二十糎高に打にげとし

ラヂオ塔

一、木造建にて頭上●で五糎高とす

外装

一、塔台天端縁はみどり色タイル張側面及天端人造洗出し仕上げとす

塔柱は下部一糎高上で玉子色タイル張仕上げとす

塔上●では黄色「リソイド」塗仕上げとす

頭上「ラヂオ」台文十糎の用にて四方がらり窓を附す

以上、



図6 簿冊 ID6492, 索引番号 81, 連番 1

「道徳新町自治連合会代表外1名より道徳公園へラヂオ塔」より「道徳公園ラヂオ塔新設工事仕様書」

市民から申し出のあったラヂオ塔の建設とそれを道徳公園に設置した上で名古屋市に寄付したいという請願は、昭和15年市参議会議案第169号の記録に従えば、「本市道徳新町自治総合会代表馬杉源次郎氏外一名より左記の通寄附申出ありたるを以て之を受納するものとす」として昭和15年8月18日に提出され、即日可決されたようだ。このようにして新たな資料から示されたのは、市民がラヂオ塔を主体的に建設・寄附していたことと、ラヂオ塔を建設・寄附した市民の趣意は皇太子誕生を祝う新公園建設の趣意と合致していたこと、そして建設したラヂオ塔の下でラヂオ体操を実施して、町民一丸となって体を鍛え大和民族の発展に寄与するメディアとして解釈されていたということだった。この検討は次節で行うこととして、続けて、同じように名古屋市の「皇太子殿下御降誕記念事業」の一環で新設された博覧会跡公園に建設・寄附されたラヂオ塔を見ていくことにしよう。

3. 2博覧会跡公園（現・港北公園）（1942年）

市民からラジオ塔の寄付があったことを記録した公文書には、上述した以外にも「南久屋連区東部有志代表より南久屋公園へラジオ塔」と「上名古屋土地区画整理組合長より上名古屋公園にラヂオ塔」、そして「港北耕地整理組合長より博覧会跡公園にラジオ塔1基」と「東宿土地区画整理組合長並に日比津土地区画整理組合長より中村公園ラジオ塔1基」の4件が保存されていた。この中で、ラジオ塔の設計図が添付されているのは、1937年に実施された日本初の国際的博覧会とされる「名古屋汎太平洋平和博覧会」の跡地に建設された博覧会跡公園（現・港北公園）のものである。

「港北耕地整理組合長より博覧会跡公園にラジオ塔1基」には、「昭和十七年市参事会議案第一号」と港北耕地整理組合長を代表として作成された「寄附採納願」、そして「ラヂオ塔建設完成届」と「ラヂオ塔設計図 縮尺拾分之一」がひとまとめに綴られている。博覧会跡公園のラジオ塔はすでに消失しており、その大きさや建築様式を窺い知る資料の一つであることから、詳細を以下に転記する（図7）。なお、昭和17年1月12日に提出された市民からの請願は、先述した道徳公園のラジオ塔と同様に、市参事会で即日可決されている。

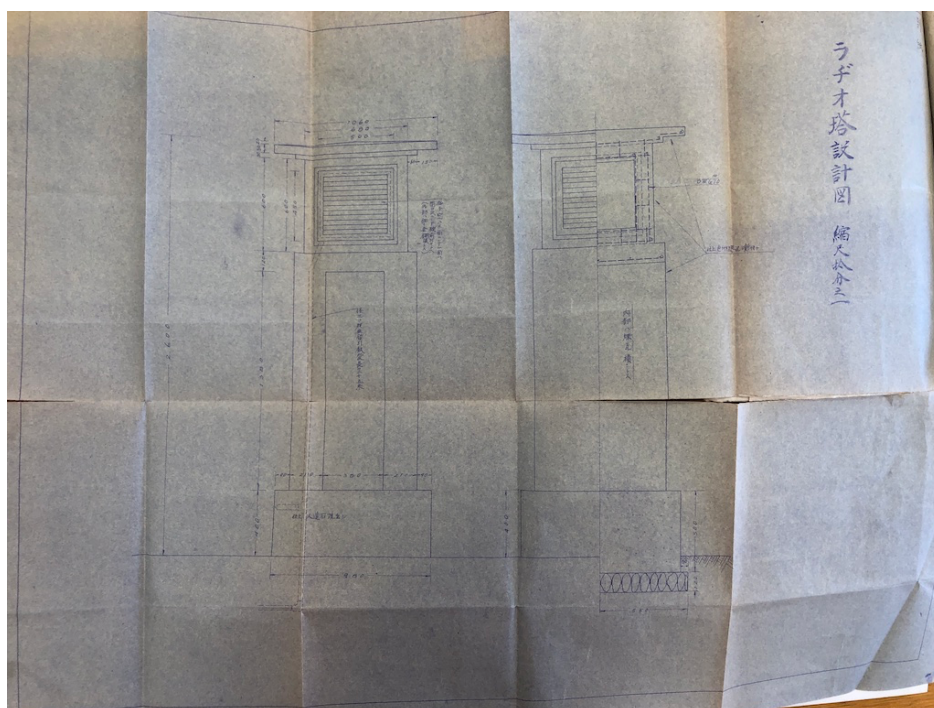


図7 簿冊 ID6496, 索引番号1, 連番1

「港北耕地整理組合長より博覧会跡公園にラジオ塔1基」より「ラヂオ塔設計図 縮尺拾分之一」

昭和十七年市参事会議案第一号

寄附受納の件

名古屋市港北耕地整理組合長磯貝浩氏より左記の通寄附申出ありたるを以て之を受納するものとす

昭和十七年一月十二日提出

名古屋市長代理名古屋市助役 佐藤正俊

一、ラジオ塔 壱基 受信装置並マイクロホン一式附

此の見積価格 金五百五拾圓也

右御市 皇太子殿下御降誕記念事業博覧会跡公園に建設の上

御寄付申上寄附採納願●候間御採納被成下度奉願候也

昭和十六年十二月四日

(住所略)
港北耕地整理組合
組合長 磯貝浩
名古屋市長 梶 忍殿

「港北耕地整理組合長より博覧会跡公園にラジオ塔1基」には趣意書は綴られていないため、どのようなことを考えて市民がラジオ塔を寄付したのかについては定かではない。そこで次節では、1943年4月8日に名古屋市土木局公園課が発行した『皇太子殿下御降誕記念事業公園』を参照しながら、市民の手で建設・寄付されたラジオ塔について考えてみたい。原資料は名古屋市鶴舞中央図書館にて保存されており館内でのみ閲覧可能だが、同資料は、2015年に松浦國弘の監修を受け、近現代資料刊行会の企画編集によって出版された『近代都市環境研究資料叢書4 近代都市の衛生環境 名古屋編37 都市計画・都市整備③』に再録されている。本稿ではこれを用いる。

4. 名古屋市による「皇太子御降誕記念事業公園」と市民からのラジオ塔寄付

4. 1 皇太子御降誕記念事業の経緯

1933年12月23日に皇太子が誕生すると、名古屋市はその祝意を表すため記念事業の実施を決定し、1934年2月23日に皇太子殿下御降誕記念事業調査臨時委員を設置して、どのような記念事業に取り組むか審議し始めた。皇室からは皇太子誕生を記念して内帑金から75万円が名古屋市に対して下賜されていたが、これは「母性並児童保護事業」に対するものだったため、名古屋市は次のように考えをまとめた。

皇太子殿下御降誕を記念あらせられ、御内帑金七十五萬圓を、母性並児童保護事業に御下賜あらせられたので、此の有難き聖旨を奉戴して、本市に於ても速かに適當なる事業の選定をすることゝなつたが、ひるがへつて本市の緑地事情は、市街の急進的膨張に伴ひ、これに対処すべき緑地の必要を痛感されつゝあり、緑地の増加は市民の保健、衛生上忽にすべからざるものであり、特に第二の国民たる児童に対し、其の情操を高め、体力を向上し、一面天真なる児童の安息所ならしむる小公園の建設こそ本事業として最も適當なりとし、市内十ヶ所に小公園の建設を決定、昭和十二年九月二十八日市会の決議を得、事業費総額五十萬圓を以つて、昭和十二年度より三ヶ年継続事業として直ちに事業に着手することゝなつた。(松浦監修・近現代資料刊行会企画編集 2015:397)

この事業では九つの公園(上名古屋公園、港北公園(旧・博覧会跡公園)、児玉公園、小碓公園、大幸公園、道徳公園、白水公園、松葉公園、八熊公園)が建設されたが、名古屋市の都市計画公園と相まって、市民は公園に配備された遊具を使ったり、運動場や相撲場、そしてボート池などを使って運動したりすることを楽しめるようになった。これら公園の建設にあたっては、地元土地区画整理組合から敷地の寄付が行われたことを筆頭に、公園に配備される各種設備の寄付というように市民から様々な配慮が行われたようである。同資料には、そうした関係各所に対して名古屋市土木局公園課が謝意を伝える文章を確認できる。

本事業公演予定地は其の大部分が地元土地区画整理組合地区であり、之等組合の協力を俟つくもの多く、工事に先立ち交渉を開始せし處、組合に於ても本事業に協力せられ、進んで其の敷地を本市に寄附せられたので、本市に於ても本事業達成に専念、銳意工事の進捗につとめ、昭和十五年に至り、本事業施設費に対し、児童運動場補助金として、国庫補助金を下附せらるゝ事に決定したるを以て、之が事業年度を二ヶ年延長し、此の国庫補助金を合せ、事業費総額六十萬八千圓を以つて、本事業の完璧を期する事になった。昭和十六年に至り、事業計画の一部を変更、市内中央部予定公園は都市計画事業として施行することゝなり、外九公園は昭和十六年三月に、松葉公園をはじめ六公園の竣功を見、残る三公園は更に一ヶ年事業年度を延長、本年三月竣功を見るに至つたのである。(中略)茲に本事業完成を記念するに當り、其の敷地の寄附に、施設に就き、種々配慮を賜りたる、

各土地地区画整理組合、名古屋中央放送局、其のほか関係各位に対し、萬腔の謝意を表する次第である。(松浦監修・近現代資料刊行会企画編集 2015:397)

なお、ここで言及されている名古屋中央放送局と記念事業との関わりを示す資料は見つかっていないことから、どのような寄付が行われたのか定かではない。くわえて、「皇太子御降誕記念事業」では市内十ヶ所に公園の建設が予定されていたが、十番目の公園の記録は「記念事業公園配置図」(松浦監修・近現代資料刊行会企画編集 2015:417)に手書きで書き込まれた「@県庁舎跡公園」しか残されておらず、名古屋中央放送局からであれ市民からであれ、その公園にラジオ塔が寄付されたかどうかは今のところ確認できていない。

ここまでの議論を整理すると、「皇太子御降誕記念事業公園」として1943年までに設立された九つの公園の内、ラジオ塔が建設・寄付されたのは上名古屋公園と港北公園、そして道徳公園の三ヶ所だったことが明らかになった。ただし、『皇太子殿下御降誕記念事業公園』の「松葉公園」のページには「四女子、篠原両組合より寄附せられましたラジオ塔があります」という記載があり、市民から寄付されたラジオ塔はもう一つ設置されていた可能性がある。これも合わせると、記念事業の一環で建設された九つの公園の内、四つの公園に市民の手でラジオ塔が建設・寄付されていたことになる。

4. 2メディア・イベント化するラジオ塔建設

このように「皇太子御降誕記念事業公園」を一望した時、気になるのは「道徳新町自治連合会代表外1名より道徳公園へラジオ塔」に綴られていた「趣意書」において見た「体位向上」と公園整備の関係性だ。戦前の名古屋市都市計画公園についてまとめた名古屋市都市センターの報告書によれば、1937年に「運動公園整備」という形で、初めて名古屋市でも都市計画公園事業が着手されることになったのだという(名古屋市都市センター 2013:18)。この試みは「これまでの「遊観の場」あるいは「名所」「庭園」といったイメージから離れ、「国民体位向上」という大義名分により、初めて公園整備事業が始められた(名古屋市都市センター 2013:18)ものだったというのだ。こうした運動公園整備事業の背景には、「国民の体位向上・運動熱が高ま」っていたことにくわえて、「昭和11年には東京オリンピックの昭和15年(1940年)開催が決定されるなどの動き」(名古屋市都市センター 2013:19)があったことを同報告書は指摘している。

これを踏まえて名古屋市民からのラジオ塔寄付について考えようとする時、その取り組みは、ラジオ塔を通じたメディア・イベント化だったように思われる。というのは、1933年の皇太子誕生と1936年の東京オリンピックの誘致とその返上、1940年の皇紀2600年記念と1941年の開戦というように1930年代から1940年代を架橋するように、市民は自らが主体的に建設したラジオ塔というメディアを作って(あるいは使って)、それらを大きく盛り立てていったように見えるからだ。それは、D. ダヤーンとE. カッツが提起した「メディアが媒介するイベント」(吉見1996:13-20)というメディア・イベント概念を拡張するような行為である(辻 2011)。そのような活動に取り組むことで市民は、メディアを通じてイベントを観察したり送られてきた情報を受容・消費したりする「受け手」の枠から逸脱し、ラジオ塔を建設・寄付するという行為を通じてイベントの主催者のように振る舞う「送り手」側に立つ役割まで担うことのできる存在になる。

このように市民からのラジオ塔寄付を解釈する場合、肯首できないのは、その試みが国家的祭祀や国民を総動員する戦争へ傾倒していく政治体制を相対化するものにも問題視するものにもならなかったことだろう。そのような意味で、ラジオ塔のローカリティは、市民の手で漂白されてしまったと考えるのが自然なように思われる。それはつまり、ラジオ塔は為政者や放送事業者に押し付けられる形で全国に増設していった側面はある一方、市民はその取り組みに賛同するようなやり方でラジオ塔を寄付していたということである。このことは同時に、土地権利者や行政の担当者と交渉を重ねたり、建設地の景観に配慮したりしながらラジオ塔を全国に増設し、そのローカリティを維持させようとした日本放送協会の総務部企画課というアクターの存在を際立たせる。無論、市民によるラジオ塔の建設と寄付の活動が他地域でも行われていたことはすでに指摘されており、為政者や放送事業者の想定から逸

脱するようなラジオ塔が存在した可能性は残されている。調査を続ける。

5. おわりに

「一戸一受信機」キャンペーンに組み込まれ、1939年から1940年頃にかけてラジオ塔が全国展開した過程を、名古屋市民が自らの手で建設・寄付したことを記す公文書を用いて批判的に検討することを試みた。こうした本稿の作業から明らかになったのは、市民の手によって建設されたラジオ塔は、建設の意義や建築様式にローカリティを見出しづらいということである。限られた資料に基づく結論ではあるが、大和民族の発展を企図した市民が、日本国民の「体位向上」という趣意をラジオ塔の展開・伝搬プロセスに追加していったことは、国外へ拡大していくラジオ塔の分布を見ていく上で重要な視点であろう。そうした目的は、また、町の景観や地域住民の生活に配慮したラジオ塔のローカリティを後景化させていく動きとつながっていったようにも見えるものであることを指摘した。

こうした観点から台湾・沖縄・インドネシア・タイなど日本の植民地支配地の拡大と共に世界に広がっていったラジオ塔に目を向ける時、ラジオ塔の下でラジオ体操を実施した人々の姿は、黒田勇が指摘するように「日本の領土であることや日本の支配を示すシンボル」（黒田 1999:211）となっていったことは間違いないだろう。こうしたシンボル化に加担したラジオ塔を検討する作業は、国外での調査なしに不可能である。ラジオ塔をめぐるメディア利用の実態や、国外のラジオ塔建設に従事した放送人の存在を掘り起こすことでこれに応えたい。別稿を期す。

注

- (1) 渡辺治男は、この時にラジオ塔の写真撮影に訪れた男性を一幡公平だと記しているが（渡辺 2021:59）、一幡が訪れたのは2017年6月であり、2016年2月に訪れた男性は別人物である（一幡 2017:12）。
- (2) 「名古屋市なんでも調査団」（<https://www.library.city.nagoya.jp/reference/nandemo.html#chap01>, 2023年2月6日アクセス）
- (3) 『新潟市公報』458号昭和7年11月25日（金曜日）7頁には、寄付受理の公的記録が記されている。
 - 寄附受理
 - 白山公園備付指定寄附
 - 一、ラヂオ塔 壱基
 - 但受信装置其他附属品一式共
 - 価格 金五百圓
 - 社団法人日本放送協会関東支部
- (4) 判読不明の文字については●を表記した。以下同様の対応とする。
- (5) 「公文書（件名）」（https://www.i-repository.net/il/meta_pub/G000065402kenmei, 2023年2月6日アクセス）
- (6) 調査団により、港北公園のラジオ塔については先んじて確認・発表されている。
- (7) (6)に同じ。

参考文献

- 『中日新聞』「ラジオ塔 戦争語り継ぐ」（2017年2月25日、22面）
- 人見佐知子, 2019, 「ラジオ塔についての覚書」『民俗文化』31, 183-227.
- , 2020, 「天王寺公園のラジオ塔」『民俗文化』32, 49-64.
- 一幡公平, 2014, 『ラヂオ塔大百科2011-2014』タカノメ特殊部隊
- , 2017, 『ラヂオ塔大百科2017』タカノメ特殊部隊
- JOCK 欄, 1933a, 「JOCK 欄 ラヂオ塔受難」『ラヂオの日本』16(5):72-74.
- , 1933b, 「JOCK 欄 CK名古屋のラヂオ塔を解剖すれば」『ラヂオの日本』16(6):66-68.
- , 1933c, 「JOCK 欄 東海支部管内のラヂオ塔概要」『ラヂオの日本』17(1):73.

- 黒田勇, 1999, 『ラジオ体操の誕生』 青弓社
- 松浦國弘監修・近現代資料刊行会企画編集, 2015, 『近代都市環境研究資料叢書4 近代都市の衛生環境 名古屋編 37 都市計画・都市整備③』 近現代資料刊行会.
- 丸山友美, 2021, 「関西に残るメディア遺構——JOBK の建設したラジオ塔」『福山大学人間文化学部紀要』21, 13-25.
———, 2022, 「関東に残るメディア遺構——JOAK の建設したラジオ塔」『福山大学人間文化学部紀要』22, 15-27.
- 村上聖一, 2017, 「放送史への新たなアプローチ①放送の「地域性」の形成過程——ラジオ時代の地域放送の分析」『放送研究と調査』67(1):28-47.
- 名古屋市図書館名古屋なんでも調査団, 2019, 「近所の公園に灯ろうに似た石の塔があります。友人にあれば「ラジオ塔」だと教えてもらいましたが、ラジオが受信できるようには見えません。名古屋のラジオ塔について教えてください」『調査団報告書』調査 No. 85, https://www.library.city.nagoya.jp/img/reference/chosahoukoku_85.pdf, 2023年1月28日アクセス.
- 名古屋都市センター, 2013, 『平成24年度NUI特別レポート 戦前の名古屋都市計画公園史について』, <http://www.nup.or.jp/nui/user/media/document/investigation/h24/NUI.aoki.pdf>, 2023年2月6日アクセス.
- 新潟市, 2000, 『新潟歴史双書4 白山公園あたり』新潟市.
『新潟市公報』(第458号, 昭和7年11月25日(金曜日))
『新潟新聞』「新潟放送局の開始」(1931年11月11日, 1面)
——— 「記念のラヂオ塔」(1932年11月11日, 1面)
——— 「新潟放送局で開局一周年記念」(1932年11月11日, 1面)
——— 「白山のラヂオ塔竣成」(1932年11月11日, 4面)
——— 「陽光輝く白山にQKラヂオ塔竣工式」(1932年11月12日, 4面)
『東北時報』「新潟のユーモア」(1933年6月4日, 5面)
- 柴田昭彦, 2021, 『旗振り山と航空灯台』ナカニシヤ.
『新愛知』「桜花の下でラヂオ聴く麗かさ」(1933年3月31日, 2面)
- 辻泉, 2011, 「メディア・イベントとしての地デジ化」『Chuo Online』, <https://yab.yomiuri.co.jp/adv/chuo/opinion/20110912.html>, 2023年2月6日アクセス.
- 渡辺治男, 2021, 「ラジオ塔について」『産業遺産研究』28:57-61.
- 吉井正彦, 2011, 「「ラヂオ塔」を訪ね歩く」『月刊みんぱく』36(5):16-17.
- 吉見俊哉, 1996, 「メディア・イベント概念の諸相」津金澤聡広編著『近代日本のメディア・イベント』同文館, 3-30.

付記

本稿は、JSPS 科研費 20K22157 の助成を受けた研究成果の一部である。なお、一次資料の調査に当たっては、新潟県立文書館及びほんぼーと新潟市立中央図書館、新潟市歴史博物館みなとぴあの学芸員並びに司書の皆さんと、市政資料館及び名古屋市鶴舞中央図書館の学芸員並びに司書の皆さん、そしてNHK 放送博物館とNHK 放送文化研究所の皆さんにご協力いただいた。現地調査に当たっては、各地で活動されている研究者の皆さんにご指導いただいた。記して感謝する。ありがとうございました。

Media Remains in Tokai Area: Radio Pagoda built by JOCK and Citizens

Tomomi MARUYAMA

This paper examines the radio pagodas erected by the Tokai Branch (JOCK) of Nihon-Hoso-Kyokai (NHK, Japan Broadcasting Corporation) and Citizens from 1933 to 1943 from three points. First, it examines why the locality found in the radio pagodas, built as a commemorative project to celebrate the one-millionth anniversary of its subscribers, were bleached. Second, this article identifies the actors who ensured the locality of the radio pagodas. And thirdly, this paper shows how the 1933 birth of the Crown Prince turned the construction of the radio pagodas into a media event. Through the above work, this paper reveals that the locality of radio pagodas built and donated by citizens was bleached out, and they came to be accepted and consumed as objects with a purpose that converged with the national goal of “improving the status quo.”

【Keywords: Radio Pagoda, Media Remains, JOCK, Production Studies】